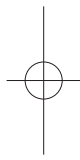
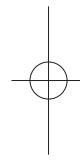


Dear _____

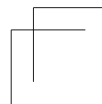
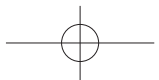
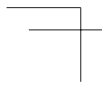
From _____



Date _____ . .



Gift for you.



喜ばれる人
に
なりなさい

永松茂久
Nagamatsu Shigehisa

母が残してくれた、たった1つの大切なこと

一時期、母の長電話が嫌だった。
今、母と長電話をしたい。

プロローグ ― 過去に託された夢

むかしむかし、あるところにお母さんとその息子の少年がいました。
あるときお母さんは少年に聞きました。

「大きくなったら何になる？」

息子は答えました。

「一等賞になる」

お母さんはふたたび聞きました。

「なんで一等賞になりたいの？」

息子は胸を張って答えました。

「だって一等賞はすごいから」

お母さんは息子に言いました。

「それじゃあ一等賞になれないね。なつてもすぐに追い越されちゃうよ」

ムスツとふてくされる息子にお母さんは続けました。

「よく聞きなさい。ひよつとしたら、あなたは何かで一等賞になるかもしれない。

でもそれはあなたのためじゃなくて、困った人を助けるためなのよ」

「そんなこと言われてもわからない。一等賞はすごいんだ」

「今はわからなくても覚えておきなさい。この世にはね、神様がいるの」

「俺、神様なんか会ったことないからわからないよ」

「ううん、あなたのおぼには目に見えるたくさんの神様がいる」

「うそだ、神様なんていないに決まってるじゃん」

「ううん、いる。それはね、『おかげさま』っていう神様。あなたが着てる服、履いている靴、これは全部『おかげさま』がつくってくれたものなの。会ったことはないけど、あなたのことを思って一生懸命つくってくれた目に見えない人たちがいるの。その『おかげさま』の存在を忘れたらダメだよ。そしてね、いつかあなたが誰かの『おかげさま』になるの。一等賞は困った人を助けるために神様たちがくれるものなのよ。だからあなたは喜ばれる人になりなさい」

「喜ばれる人？」

「そう。あなたが人から喜ばれる人になること。それが私の夢」

お母さんがとても難しいことを言っているように聞こえて、少年にとってその話は遠い記憶になりました。

やがて少年は大人になり旅に出ました。

その旅路でたくさんの人たちに助けられ、お母さんが昔言っていた『おかげさ

ま』の存在に気づいていきました。

その『おかげさま』は全員、お母さんが言ったことと同じ言葉を言いました。

「喜ばれる人になりなさい」

と。

これはそんな母と息子の物語。

電話の向こうで呼吸が聞こえる。

苦しそうでうめくような声。

一度聞くと一生忘れられない声。

まわりで名前を叫び続ける人たちの声が重なる。

しかし僕の耳には、不思議とその苦しい声しか入ってこない。

電話を切り、僕は仕事に戻る。

仕事とはいっても、その場所は僕を囲むために人がつくってくれた場。

抜けることはできない。

あのとときの僕の姿をうつろというんだろうか。

目の前の景色がどんだん色をなくしていく。

そんなことを知らないまわりからは、おかまいなしにたくさん質問が降ってきて、それに僕は一生懸命答えた。

「今、目の前にいる人のために」

幼い頃から言われ続けたその教えにしたがって。

話を終えた直後、ふたたび着信あり。

僕は会場を飛び出し、かかってきた着信を取り、会場の前の駐車場に行った。

あのととき、寝ころがった駐車場の、車止めに置いた頭の感触や鉄の冷たさ、そして携帯画面の背後にたまたま重なって見えたあの月を、僕は生涯忘れることはないだろう。

今、あなたのお母さんは笑っていますか？

もくじ

プロローグ——過去に託された夢 6

第 1 章

おかげさま母さん

- 01 運は買える？—— 22
- 02 告白—— 24
- 03 そして母はお坊さんになった—— 27
- 04 トイレの教え—— 29
- 05 お母さん向けのすごい教育論—— 32

- 06 父からの電話—— 39
07 プロジェクト発足—— 44
08 宣告—— 47

第 2 章

ギフト屋母さん

- 09 原風景—— 54
10 夢工房—— 56
11 私は人に喜ばれることが大好き—— 58
12 自己肯定感って何ですか？—— 61
13 ハンガー母さんと閻魔大王—— 65
14 夢との出会い—— 70
15 毎日が宴会—— 72

- 16 相手の気持ちを考えるということ—— 75
17 プラス思考母さん—— 80
18 東京タワーの見える街で—— 83
19 就職活動歴 30 分—— 87
20 遠回りの中で見つけた近道—— 90
21 オタフクソース—— 91
22 たこ焼きの本をつくろう—— 95
23 日本一のたこ焼き屋さんとの出会い—— 97
24 ドヤ顔母さん—— 100

第 3 章

応援母さん

- 25 商人になるための大きな壁—— 108

第
4
章

M O T H E R

- 26 ベランダたこ焼き研究所—— 110
- 27 我を抜きましよう—— 114
- 28 板挟み母さん—— 118
- 29 とりあえずプロっぽく—— 124
- 30 職場をつくりましよう—— 127
- 31 お金がない!—— 130
- 32 業態変更—— 133
- 33 逆襲の揺さぶり—— 136
- 34 男前母さん—— 141
- 35 笑顔が集まるもう1つの家—— 146
- 36 出会った人に感動を—— 149
- 37 喜ばれることへの追求が道を開く—— 154
- 38 最高がいつばい—— 162
- 39 母の挑戦—— 166
- 40 長電話—— 169
- 41 苦しいときになって初めてわかること—— 174
- 42 子ども向けのすごい教育論—— 177
- 43 厄年に襲ってきた泣きっ面に蜂—— 182
- 44 姫と3人の家来たち—— 186
- 45 母が教えてくれた一番大切なこと—— 189
- 46 メンターって何ですか?—— 196
- 47 枯れていく命と共に—— 199

- 48 救急車——202
- 49 埼玉草加にて——207
- 50 テレビ電話——212
- 51 空港にて——218
- 52 たつみちゃん感謝祭——220
- 53 僕が一番うらやましい人たち——227
- 54 ノート——230
- 55 誓い——236

第5章

僕は必ずあなたを日本の母にします

- 56 最古の情報産業である出版一本へ——242
- 57 本は100パーセント読者のためにある——245

- 58 出版の発射台を元気にする——249
- 59 15000分の1——252
- 60 チャンスは友が運んでくる——255
- 61 喜ばれるのかという新基準——259
- 62 話し方はスキルよりメンタル——264
- 63 初めてのママ向けの本に込めた3つの要素——267
- 64 運は存在する——269
- 65 『人は話し方が9割』の奇跡——274

最終章

喜ばれる人になりなさい

- 66 喜ばれる人は不変のテーマ——282
- 67 応援する人が応援される時代の幕開け——285

第
1
章

おかげさま母さん

68 日本一著者を育てた人になる—— 289

69 D E A R——²⁹²

70 「喜ばれる人になる」ということ—— 295

エピローグ—— 未来にかける夢 300

あとがき この本にかけた3つの思い 303

ブックデザイン
D T P
野中賢(システムタンク)
tofuture

01 運は買える？

「茂久、知ってる？ 運って買えるのよ」

僕の母、永松たつみはこうした一見おかしなことを、大真面目に言うタイプだった。

「あのね、この世には目に見えないお金があるの。そのお金はね、徳っていうのよ」

「俺は目に見えるお金がいい」

「目に見えるお金も買えるお金。それをね、徳っていうの」

いつものように右から左に話を聞いている僕に、かまわず母は続けた。毎度同じ話なので、次にどんな内容がくるかはすでにわかっている。

この人は前回も同じ話をしたことを覚えていないのだろうか？ それが僕には不

思議でしかたなかった。

「その徳はね、喜ばれることをしたら1個たまるの。そしてね、人に気づかれないように喜ばれることをしたら、さらにボーナスがついて10倍たまるのよ」

何を基準に10倍ポイントがつくのかまったく意味がわからない。

しかし母は、それをさも10倍ポイントをもらって喜んだことがある人かのように、迷いなく楽しそうに話す。ある意味、特技といってもいいくらいに。

「そしてね、親の積んだ徳は子どもに流れるの。だから私は喜ばれることをたくさんして、あなたたちに徳を流すからね」

「母さん、俺、だから目に見えない徳より、目に見えるお金がいいって」

「ふう。あなたもまだまだ子どもね。まあいいわ。いつかわかる。だから私は喜ばれる人になるために今日も仕事をしてくるから、自分で何かをつくって食べてね」

「いや、今もう夜の8時だよ。腹減った」

そう言う僕と弟を無視して母は階段を下り、自らが経営するギフト屋に行った。僕たちの毎日はこんな感じだった。

「あなたたちのために徳を積む」

これが母の口癖だったが、幼い頃、この「徳」という言葉は僕たちにとっては、母が自分の仕事をやりたいための方便だと思っていた。

02 / 告白

僕の生まれた実家は昭和初期、曾祖父の経営する下駄の卸問屋として、多くの幼稚や番頭さんを抱えていた名残からか、とにかく家が広がった。

家の真ん中には、ふだんは何にも使われていなかった大きな仏間があった。中学

校にあがったある日、母と同年くらいの男性と女性が月に1回ほどやってきて、その仏間で何やら話をするようになった。

話を聞くと、母のお店の取引先メーカーの社長さんと、同業者の女性らしい。最初の頃は話を聞いているのは母1人だったが、数を重ねるにつれ、その話を聞く人の数が増えていった。

そんなある日、2人でご飯を食べているときに、母が申し訳なさそうに、そして何か言いたげにモジモジしていた。

「あのね、茂久。ちょっと相談があつて……」

「さっきからなに？ 早く言つてよ」

「そうね。んじゃ言うね。びっくりしないでね」

「しないよ」

「私、お坊さんになっていい？」

僕は思わず味噌汁を吹き出した。まったく予期せぬところからカウンターパンチを喰らった気分だった。

「お、お坊さんって、店はどうするんだよ！」

「あ、それなんだけどね、お坊さんっていつでもね、家にいてできるお坊さんなの」「なんだよそれ、そんなお坊さんってありなの？　なんかよくわからないけど俺は嫌だ」

「お願い、あんたたちに迷惑はかけないから！」

まるでどっちが親だかわからないような会話だったが、飲み会から帰ってきた父

にそのことを言うと、諦め顔で、「どうせすぐ飽きる。ほっとけ」と意に介さない。仏間に来ていたおじさんとおばさんは、どうやらそのお寺の人だったということが後になってわかった。

03

そして母はお坊さんになった

母は何事もやりはじめると、まわりが見えなくなるタイプだった。

父と僕の予想に反して、我が家の仏間にはどんどん悩みを抱えた人が増えていった。

母はあっという間にお坊さんの免許を取得し、位を駆け上がっていることがわかった。気がつけば中2の終わりには、反対していた父までもが巻き込まれ、母の説法の隣に座るようになっていた。

経営するギフト屋もスタッフが増え、母はやがて現場から抜けるようになり、2階に上がると「チーン」という音と共にたくさんの方がお経を上げ、その後、輪になって母に人生相談をするという不思議な家に変身していた。

僕が中学生の当時は映画『ビー・バップ・ハイスクール』の全盛期。

僕も例にもれず、不良に憧れ、短ランとボンタンで剃り込みを入れ、仲間たちと共に元気に暴れまわっていた中2病全盛期。その兄を見て育ったせいか、弟の幸士も小学生ながらに兄を超える超ヤンチャ坊主になった。

フリフリのエプロンやメルヘンな小物に囲まれたギフト屋の中を通って2階に上がると、母のまわりには悩める人たちがいて人生相談をしている。今振り返ってみても、我が家はものすごく変な光景だったと思う。

しかし、母の持つよくわからないカリスマ性というのだろうか。気がつけば僕の仲間の悪ガキたちも、説法の中に正座して座るようになった。僕はそれが嫌でい

も母と口ゲンカばかりしていた。

集会のない日、久々に食卓に集まったとしても、父と母の会話は「徳を積む」とか「利他」とか「感謝」とか意味不明な仏教用語が飛び交う。

いつのまにか我が家の壁は、母が書いた「おかげさまの教え」や、相田みつをさんの『にんげんだもの』の日めくりカレンダーで埋め尽くされていくようになった。

04 / トイレの教え

ある日、母はこんな紙を書いてトイレに貼った。

茂久くん、幸士くん

今日も一日、たくさんの人たちのおかげさまで
楽しい一日を過ごせてよかったね

人間一人ではできないことが多いけれど
みんなが助けてくれて

今日のわたしたちがあるのよね

おかげさまを忘れない人でいてくださいよね

さちっであいさつできていますか？

おはようございます

こんにちは

こんばんは

ありがとう
すみません
ごめんなさい
あいさつが立派にできる人って
素敵な人になれると思うよ

お父さんお母さんの大事な宝の二人だから
どうぞ立派に成長してください

お父さん、お母さんより

ビー・バップ・ハイスクールの流行りに乗った悪ガキ少年に似つかわぬ、自己啓発セミナーのような家庭環境。

嫌ではあったが、人間は環境の生き物であるということがわかる今となっては、「徳」「利他」「感謝」という言葉が僕の中で無意識にインストールされたのは、間違いなくその時期であって、それはやはり母の影響が大きかったのだと思う。

母を中心として家族1人ひとりが好き勝手に好きなことをやっている家ではあったが、それなりにバランスは取れていた。

05

お母さん向けのすごい教育論

母は独特の目線を持っている人だった。

お坊さんの資格を取って、悩める人たちに向けていろんなカウンセリングをやっ

ていた。仕事や人生、考え方を提案しながら、ときにはずっとその人の話を聞いてり、ときには厳しくさしたりしながら多くの人に向き合っていた。

その中で、際立って印象に残っていることがある。

相談相手は子どものことで悩んでいるお母さんだった。

内容を簡単に説明すると、子どもが引きこもりになってしまい、子育て勉強会に行ったところ「本人の自己肯定感が足りていないから、とにかくほめて育てなさい」と言われたらしい。

この悩みに対する母の回答に僕はびっくりした。

「とにかくほめろってどういうこと？」

「何があってもいい面を見なさいということでした」

「それをしたら子どもをダメにするんじゃない？」

「え??」

端っここで説法を聞いていた僕も、そのお母さんと同じく「えっ?」と思った。

「あのね、最近思うんだけど、『どんなことでもほめなさい』っていう理論があるけど、私はそれはどうなんだろうと思うのよね。家ではそれで通用するかもしれない。でもね、私は子どもはいつか社会に返す存在だと思ってるのよ」

社会に返す。たしかに僕と弟はそう言われて育った。その言葉に「なんて冷たい母親なんだ」と思ったこともある。そういう意味では「自分の子だから」と甘やかされた記憶はあまりない。

お世話になった人にちゃんとお礼は言ったか?

筋道は通しているか?

恩を忘れてはいないか?

自分の我ばかりを通そうとしていないか?

子どもの頃はうっとうしかったが、そのうっとうしい教えが社会に出て驚くほど役に立った。

母は最初から僕たちを本気で「社会に返す」つもりだったのだと思う。

「なんでもかんでもほめてばかりいたら、いつかその子はほめられないと何もできない子になるわよ。ダメなことはダメってしつかりと言うのも愛じゃないのかな。子どもを信じているからこそ厳しいことも言えるのよね」

なるほど。たしかに信じていない人に厳しいことは言えない。

「でもその勉強会で『厳しいことを言っはいけない』って言われたんです。うるさく言っはダメだと」

「あなたは聖母マリアになろうとしてるの？」

「え？ まさか、そんなすごい人になろうなんて……」

「お母さんってね、何千年も前からうるさい存在だったのよ。当たり前よね。自分のお腹を痛めて産んだ子なんだから。そんな何千年もたくさんの方ができなかった聖母マリアみたいな存在を目指すほうが無謀じゃない？」

これには笑った。そして今、子育てで悩んでいるお母さんに僕がこの言葉を言うと、けっこうハツとする人が多いが、実はこれは母のパクリだ。

「お母さんはそもそももうるさくて当たり前。『どんなことでもほめなさい』系の話に疑問を持つのはその理由からなのよ。子育てに悩んで、その上、ほめられない自

分にまた悩んで母親自身が自己肯定感を失ってしまったら、結局一番かわいそうなのは子どもだよ。それより他にやることあるでしょ」

「たつみさんはどうされてるんですか？」

「私は母として3つのことだけを決めてるの」

「どんなことですか」

ちよつと間を置いて母は答えた。

「えっとね、1つめは子どもに対する心配をする時間があるなら、それを自分の好きなことをやる時間に変えること。その姿を子どもに見せれば、子どもは将来そうやって楽しく生きることが出来る人間になるって信じてるから」

僕も思わずメモをした。そのノートは今でも手元に残っている。

「2つめは子どもがどんな状態であっても、お母さん自身が自分の機嫌は自分で取

りながら明るく生きること」

たしかにあなたはいつも明るいのです。そんな誓いを持ってたんですね。

「そして3つめが何があっても子どもの味方でい続けること。何があっても子どもの未来を信じること」

この話は、母がもうすでに60歳を過ぎていた頃の話だ。

約25年もいろんな人の人生相談を受けて熟練したのか、もしくはあまりにも僕と弟が迷惑をかけすぎたがゆえに開眼させてしまったのかはわからない。人様に迷惑をかけて頭を下げさせたのは、僕と弟と通算したら申し訳なくなるくらいの数だから。

息子が言うのもなんだが、母の言葉に矛盾はなかった。いや、むしろ母はこの言葉に沿って生きてきたのかもしれない。

厳しいときは家出したくなるくらい厳しかったし、どんなときもいつも明るかつ

た。そして何があっても僕たちを見捨てなかった。

「あんなのこと信じてるよ」

「大丈夫よ、あなたならできるから」

母のこの言葉は年齢を重ねるたびに、今も深く心の奥に響いてくる。

06

父からの電話

2015年、僕と弟の経営は共に順調だった。

飲食店事業である、陽なた家グループは大分の中津に2店舗、そして福岡市のメイン繁華街である大名に出した「大名陽なた家」も予約でいつも満員御礼。その勢いに乗って博多水炊き、弟が初経営者としてはじめることになった博多ラーメンの店を同じ通りに出店したばかりだった。

その頃の僕は人材育成事業として、全国を講演でまわり、その流れではじまった執筆業も累計で80万部に到達し、出版スタジオのプロデューズ作品も30作を超えるようになっていた。新しく出店した2店舗とも順調に滑り出し一息ついた頃、久しぶりに父から連絡があった。

「茂久、久しぶりだな。そっちは順調か？」

「うん、おかげさまで幸士（弟）の店も調子いいよ」

「そうか。よかった……」

父はそう言ってしばらく沈黙した。ふだんないことなので少し嫌な予感がした。

「実は大変なことが起きた」

「なに、なに？ 直球で言って」

「……たつみが癌がんになった」

一瞬詰まったが、僕はすぐに気を取り直した。そもそも30年前も母は癌がんになった経験がある。

しかも今の時代、60歳を超えれば人はなんらかの故障を起こす。2人に1人は癌がんになる時代なのだ。そのことを父に言った。

「そうなんだけどな……。そんな軽い場所ならいいんだけどな……」

いつも強気で元気な父の声が重い。大げさな表現をするタイプではないので、なおさら嫌な予感がした。

「すい臓癌だ。そしてたぶん転移してる」

父いわく、初めての検査に行く前、母は1週間ほど食欲がなかったらしい。経営していたフィットネススクラブの2号店のオープンによる疲れも溜まっている

と思い、いつも出張で来てくれるマッサージ師の女性に、予定を前倒ししてもらって施術に入ってもらったらしい。

そのときに開口一番、母に黄疸が出ていると言われ、父の知り合いの病院に行った。その検査の後、すぐに設備の整った病院を紹介され、そのまま精密検査を受けたということだった。

母は若い頃に病気をして以来、健康オタクだった。いつも家には新しい健康食品やサプリ、水などが並び、そのときのブーム商品を僕たちに押し付けてきた。

僕たち飲食店は肉体労働だ。当然、身体になんらかの疲労が溜まると身体が痛くなることだってある。背中をほぐそうと実家に帰ってマッサージ機に寝っころがっている

「あんたすい臓が悪いんじゃない？ すい臓は本当に怖いのよ」

「いつも言っていた。」

そもそもその言葉で、僕はすい臓という存在を認識したくらいだった。

しかも転移すると末期だということも母から聞いていた。

まさかその母本人がすい臓癌になるとは。

「検査はいつ？」

「もう終わって明日最終結果が出る」

「わかった。立ち会おう。今から戻るよ」

そのまま僕は弟の幸士を車に乗せて、福岡から中津に戻った。以前は福岡というと中津からかなり遠かったが、高速がつながったので飛ばせば1時間半もかからずに戻る。

何かを感じた無言のままの幸士との車の中で、高速道路をつくってくれた見知らぬ「おかげさま」の存在に感謝したのを今でも覚えている。

「母さんは？」

僕たち2人は実家に帰り着くと同時に父に聞いた。

「仏間にいるよ」

曇りガラスの切れ間の透明な部分から覗くと、母は仏壇の前に正座して座っていた。声はかけなかった。

「2人ともこっちに來い」

父から呼ばれ、僕たちは実家の1階部分にあった閉店したお店の跡地に連れて行かれた。3人とも無言だった。口を開いたのは幸士だった。

「父さん、すい臓癌ってそんなに悪いの？」

「……よくわからないけど、たぶん悪いな」

ふだん気丈な父がうつすら目に涙を浮かべていた。

それで僕たち2人は本格的に状況を理解した。

「お前たち2人をお願いがある」

聞く前からなんでもやるつもりだった。おそらくそれは幸士も同じ気持ちだったと思う。

「俺は何があってもたつみを助けない。どんなことをしてでも」

父の言葉は本気だった。

そもそも軽い気持ちや単なる見栄でそんなことを言うなど九州男児としてありえない。「自分の言葉には絶対に責任を持って」と言い続けてきた父の言葉は深く響いた。

「俺の全財産を使ってでもあいつを助ける。それが俺の役目だ。茂久、幸士。お前たちも手伝ってくれるか？」

「うん、もちろん。なあ幸士」

「当たり前。俺ももう経営者だし」

父は厳しい事業家で、とても堅実なタイプだ。何も考えずに使ってしまう僕とは違って相当な資産を持っているはず。その父が全財産をかけるという。

ことの重さがどんどん自分の中のにしかかってくる。

油断するところちまで泣いてしまいそうだ。でも今はだめだ。一番辛いのは母本人なのだから。

「そうか。ありがとうな。そしてもう1つお願いがある」

「なんでも」

「俺はたつみの身の回りのことを全部やる。茂久は本を書くようになって心の仕組

みの勉強をしてきたよな。だからたつみのメンタルのフォローをしてくれないか？」

「わかった。俺の持つてるすべてのノウハウを使って母さんの心を明るくするよ」

「幸士も茂久をフォローしながら、できるだけたつみに連絡を取ってやってほしい。オープンしたばかりだから無理なくでいいからな」

「うん」

こうして妻や孫たちを巻き込んだ、僕たち男3人での「たつみちゃん復活プロジェクト」がはじまった。

08

宣告

翌日、中津市民病院。

店をオープンしたばかりの幸士を福岡に戻し、父と僕が結果に立ち会った。

母を先生の前に座らせ、隣に父、そして僕は母の後ろに座った。
年の頃40代中盤くらいの先生だった。

まずは先生がすい臓の場所や機能、肝臓やたんのうとの関係性を丁寧に教えてくれた。

「先生、それで病名は」

説明はいい、とばかりに父が遮さへぎって聞いた。先生は話をやめて一呼吸置いて答えた。

「すい臓癌です。たぶん間違いないでしょう」

「…そうですか」

母は毅然と答えた。

しかしその次の言葉は予想していなかったようだった。

「おそらくこちらの肝臓部分の白い影は転移かと」

宣告の重さは父から聞いておおよそ覚悟はしていたものの、想像と実際に聞くのでは威力が違った。転移のことまで聞かされていなかった母のショックは僕たちの比ではなかったと思う。

すい臓癌の肝臓転移。もともと病気に詳しい母だから、この意味は即座に理解したのだろう。背中の方が抜け、肩がガクッと落ちた。それを父が支えた。僕はその光景を後ろから見るだけだった。

病室を出て父が会計をする間、母は僕の手をずっと握っていた。心なしかその時点で、すでに痩せはじめているように感じた。

翌日、僕は福岡に戻り、出店当初からずっとお世話になっていた女性経営者を訪ね、母の病状の相談をした。その方の名前は藤堂和子さんといって、福岡でその人知らない人はもぐりだと言われるほどの大経営者で、「日本の人脈」と言われている方。あつという間に僕の目の前で九州大学病院の特別室を押さえてくれ、そのまま母は入院になった。

運を持っている人というのはいるのだな、ということをも自分の母を見ながら感じた。癌の発覚以来、闘病生活とは思えないほどたくさんの人が支えてくれた。

母は僕のつくってきたイベントにほぼ参加していた（呼ばなかったらふてくされるため）。だから全国に僕を通じた知り合いが多いこともあつて、いろんな方面からサブリヤ情報、お見舞いやお花があふれ、なんともにぎやかな病院生活になった。

たまたまだが、初抗がん剤の前日。僕は東京で一本の会食の予定があつた。

その会食相手はテレビに何度も出演している超有名なお医者さんで、僕の本を読んで会いたいと言ってくれたので、知り合いがセティングしてくれた。

その場で、翌日母が抗がん剤を投与するということを伝えると

「実は僕は明日福岡なんだよ。迷惑じゃなければお母さんに会いに行つていいかな？」

ということになった。

いきなりその有名な先生が私服でやってきて

「永松たつみさんの病室を教えてください」

となったため、病院がちょっとした騒ぎになつたらしい。

九大病院は福岡にあり、しかも僕たちは偶然にも福岡。当時僕と弟は大名陽なた家の隣にマンションを借りていたので、そこで父と家族たちが福岡に大移動し、合宿生活がはじまつた。

お金はかかるが個室にしたのは、我が家が裕福とかそんな問題ではなく

第2章

ギフト屋母さん

「おそらくたくさんの人たちが会いに来るから」というまわりの患者さんたちへの配慮が第一の目的だった。そしてその配慮は見事に当たった。

こうして母のにぎやかな闘病生活がはじまった。